

う。連帯責任とかチームワークと言ふ前に、間違いやあやまち、悪行は高校生なんかには付きものじゃないだろう。か。スポーツをやっている高校生が全員品行方正なんてあり得ない。

ヒーローの不在

ゴルフでのプレイの素晴らしさと私生活での身の処し方は別ではないのか。有名税？ それにしても、タイガー・ウッズの場合、バッシングの背景はどこか白人社会の偽善と差別的視線のようなものを感ずるのは僕だけではないだろう。沖繩出身のゴルファーが海外で活躍しているのを見て、それらの人たちが十分に活躍できるためには、プライバシーについては踏み込まな

いという大人のルールが必要なのではないか、とタイガー騒動をみながら思ってしまった。

ヒーローの不在。この現代社会では、ヒーローの賞味期限が切ないほど短い。タイガー・ウッズはこの困難を克服してカムバックしたならば、もっともつと大きなヒーローになれるのだろう。そして、それはオバマ、ハトヤマといった名前前に託された希望の賞味期限とどこが重なっているようにも思える。私たちが直面している問題の解決策は、あれらのヒーローがもたらしてくれるのではなく、自分たちで作らなければいけません。200%、政府の仕事なのではないか。
(TBSアメリカ総局長)



「医師の過重労働」

江原明の働

医師の過重労働

小児科医の現場から

医療崩壊 住民に要因?

勤務医の過酷な現場紹介

出版

病院勤務医として小児科に20年近く従事した医師である江原明さんが、自らの体験などを基に、過酷な医療現場の実態を明らかにした本「医師の過重労働」(勁草書房・2625円)を出した。勤務医は日

中勤務に加え、休日夜間の救急外来も担う。救急外来の夜間当直医の場合、月に5回以上の割合で連続40時間近い長時間勤務をこなす。どの程度

唐獅子

桐野夏生の小説「メタボ」の主要な舞台は那覇である。千葉出身の主人公「僕」は過去の記憶を失っている。主人公は、宮古島出身の伊良部昭光との交流の中で徐々に失われた時を取り戻していく。それは、破壊された家族の記憶であった。主人公にとって家族を壊すことは自分を壊すことだったが、最後に昭光に救われることになる。

波平 八郎

久茂地川に注いでいるって、知ってるか」といふ感じだ。ガープ川は暗渠である。川にふたがしてあって牧畜あたりでは流れを直接見ることはできない。記憶を失った主人公の心象風景が暗渠となったガープ川の情景と重ねて描写される。暗渠に向かって光を失っていく川は主人公の家族の記憶そのものである。

ガープ川

この物語は、那覇を描いた都市小説としての楽しみもある。登場人物がいる場所はだいたいこんなところである。国際通りから少し歩いたところにあるゲストハウス。那覇には泊1500円程度のゲストハウスが点在していて、いまそこの那覇の様子をよく映している。浮島通りのカフエ、ニューパラダイス通りのバー、安里の喫茶店、松山のホストクラブ。これらの界隈はいずれも県内外の若者たちがよく出入りする場所柄である。

ガープ川が暗い流れになる様子は次のように描かれている。「市場に架かる橋の下から、急に暗渠になり、闇に向かって流れて行く」。この市場は、「その橋をまたいで、昔ながらの市場がひろがっている(略)。おばさんたちが、ゴザを広げて、野菜や果物を売っている」とある。ガープ川が暗渠になり橋が架かっている市場は、農産市場だ。桐野夏生が描いた那覇はガープ川だった。この川が暗渠になる直前の橋は農産市場の橋である。この橋は、よしもとはなが「ちんぬくじゅうじい」これも家族の崩壊と再生がテーマで描いた橋でもある。日本を代表する2人の女性作家は、はからずも農産市場の小さな橋に着目した。橋の名前はまたない。
(県立芸大准教授)

文庫・新書

「山田洋次」

(新田匡央著)

「男はつらいよ」「息子」などの作品で、市井に生きる家族の姿を描き続けてきた山田洋次監督。本書は、最新作「おとうと」の撮影現場に著者が密着取材し、「山田組」の魅力に迫ったルポルタージュ。

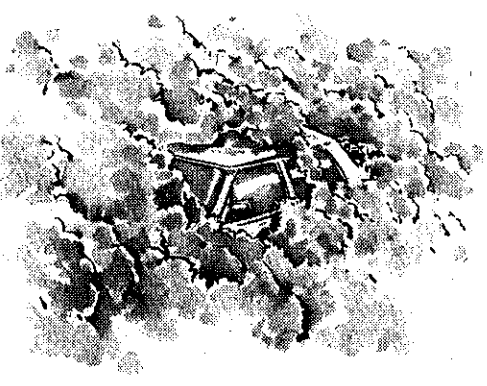
国内外の見学客を呼びこみやすい立地が決め手の一つとなった。欧米の大型美術館では、近

県内作家シリーズ

コウモリ田舎の町々

作・清原つる代
画・東 光二

空き家の裏山に隣接した駐車場に停めてあった車一台が土砂に殆ど埋まっているのを同人が発見、中に男が閉じ込められているのに気づいて警察に通報した。消防が出動して重機を使い、土砂を取り除いて埋没しかけた車の中から男を救出した。吉宗社長だったそうだ。そこまでならめでたし、めでたしで何事もなく終わる筈であったのに、除去作業中の土砂の中から野犬が食わえていた片腕の持ち主と覚しき男性の腐乱死体が掘り出された。異変を嗅ぎつけた警察の捜索の結果、さらに近くの土砂崩れ現場からも白骨化した遺体が次々と二体、発見されるに及んで騒動に火がついた。



を持つ二人の息子の名前を共犯者として上げたため、安城市に住む長男と岡崎市の次男とが連行され、事情聴取を受けた

美術館の分館広がる フランス

国内外の見学客を呼びこみやすい立地が決め手の一つとなった。

欧米の大型美術館では、近